

序章 《黑夜事变》

第一章 黒い夜

深夜。ヨルファミリア本部は、いつもと変わらない静けさに包まれていた。

最初に異変へ気づいたのは、第2席まふ이었다。

「……ヨル」

「ん？」

「何か来ます」

いつもの柔らかさが、まふいの表情から消えていた。

その直後、本部全体に警報が鳴り響く。

ヨルが窓へ向かう。街の明かりが、端から順に消えていた。一つ、また一つ。まるで夜そのものが広がり、街を飲み込んでいくようだった。



「通信は？」

レモンが端末を確認する。

「駄目。外と繋がらない」

「予備回線も？」

「全部」

ヨルは数秒だけ暗い街を見つめ、それから振り返った。

「全員、集まって」

ほどなくして十人が揃う。

第1席ヨル。第2席まふい。第3席レモン。第4席トムカス。第5席ゆうカス。第6席いんカス。第7席あめちゃん。第8席にゃんこ。第9席ごま塩。そして第10席なっち。

誰一人欠けていないことを確認して、ヨルは頷いた。

「全員いるね」

「いるゴマ！」



「よし」

ヨルは再び窓の外を見る。街のあちこちで、今度は小さな火の手が上がり始めていた。

「じゃあ行こっか」

あまりにも普段通りの声だった。

レモンが苦笑する。

「ヨル、外とんでもないことになってるけど？」

「だからでしょ？」

ヨルは笑った。

「うちの縄張りで、好き勝手してる奴がいるんだから」

空気が変わる。

十人が、それぞれの武器へ手を伸ばした。

その夜、後に《黑夜事变》と呼ばれる戦いが始まった。



第二章 包囲

本部を出てすぐ、異常の正体が見えてきた。

東では重装備の部隊が道路を塞ぎ、西では別の装備を持つ一団が建物の間へ展開している。北と南でも、異なる紋章を付けた者たちが同時に動いていた。

一つの勢力ではない。

複数の敵が、同じ夜に、同じ街へ入り込んでいる。

「……なるほど」

ヨルは周囲を見渡した。

火の手が上がっている場所。敵が集中している通り。わざと開けられた逃げ道。

全部が、十人を散らすように配置されている。

「私たちがバラバラにしたいんだ」

まふいが鎖へ手をかける。



「でしたら、全員ここで迎撃しますか？」

「いや」

ヨルは首を振った。

「ここに固まったら、街がもたない」

離れた場所で爆発音が響く。誰かの悲鳴も聞こえた。

ヨルは九人を見る。

「みんな」

全員の視線が集まる。

「任せてもいい？」

返事は一瞬だった。

「もちろん」

「任せて！」

「やってやるぜ」



「余裕ゴマ！」

それぞれが担当する区域へ散っていく。

だが、まふいだけは動かなかった。

「……まふい？」

「私はヨルと行きます」

「いや、まふいも——」

「嫌です」

迷いのない即答だった。

「ヨルから離れるつもりはありません」

ヨルは数秒、まふいを見る。

「……分かった」

「ありがとうございます」

「でも無茶はしないでね」



「それはヨルにも言えます」

「はいはい」

二人も中心区域へ向かう。

街のあちこちで、十人それぞれの戦いが始まった。

第三章 それぞれの戦場

最初に大きくぶつかったのは、レモンとトムカスだった。

狭い通りを埋めるほどの敵を前に、レモンが《レモンエッジ》を抜く。その隣で、トムカスも長く使い続けてきた剣を鞘から引き抜いた。

「多いなあ……」

レモンが数を見て言う。

「俺が前を受ける」

「一人で？」

「お前は好きに暴れろ」



レモンが笑った。

「じゃあ遠慮なく！」

二人が同時に踏み込む。

トムカスの剣が正面の武器を弾き、空いた場所へ身体ごと入り込む。力で押し開けた一瞬の隙を、レモンは見逃さない。横から滑り込み、《レモンエッジ》が敵の陣形を切り崩した。

「左！」

言われるより先に、トムカスの剣が左から迫った攻撃を受ける。

「もう見えてる」

「なら言わせるなよ」

「一応確認」

「余計なお世話だ」



互いに細かい指示を出しているわけではない。それでも、片方が作った隙へもう片方が入る。片方が危険になれば、もう片方が先に動いている。

敵の数が減り、最後の一人が退いたところで、ようやく二人は足を止めた。

レモンが真っ先にトムカスを見る。

「怪我してない？」

「してない」

「ほんと？」

「お前こそ」

「私は平気」

トムカスの剣には細かな刃こぼれが増えていた。レモンはそこへ一度目を向けたが、何も言わない。

「……じゃ、行こっか」



「おう」

二人は並んで次の戦場へ走った。

別区域では、ゆーカスといんカスが背中合わせになっていた。

「いんカス」

「ん？」

「右お願い」

「了解」

それだけで十分だった。

ゆーカスが正面の敵を引きつける。その間に、いんカスが右から崩す。次は逆。いんカスが相手の体勢を乱し、ゆーカスが間を置かず追撃した。

二人の距離はほとんど離れない。

ゆーカスの死角へ刃が入れば、いんカスが受ける。いんカスの足が止まれば、ゆーカスがその前へ入る。



「お前、近くね？」

「今さら？」

「まあいいけど」

「俺も」

一瞬だけ、二人が黙る。

「……戦闘中だぞ」

「お前が言ったんだろ」

次の瞬間には、また同時に動いていた。

あめちゃんとにゃんこの区域も、楽ではなかった。

敵の数は多く、正面から押し返そうとすれば横へ回り込まれる。

「あめちゃん！」

「大丈夫！」



にゃんこが受けた攻撃の脇を、あめちゃんが抜ける。反撃へ出たあめちゃんの背後を、今度はにゃんこが守った。

「無茶しないで！」

「にゃんこも！」

「私はしてない！」

「今した！」

「してない！」

口では言い合いながら、動きは離れない。

一人では塞げない場所を二人で塞ぐ。一人では届かない敵へ、片方が道を作る。

最後まで、どちらか一人だけが前へ出ることはなかった。

第四章 末席の意地

別の通り。



第9席ごま塩と第10席なっちは、戦闘開始早々から敵に追われ、走っていた。

「なんでこんなに追ってくるゴマ!？」

「知らない！」

「多いゴマァァ！」

「うるさい！走って！」

「走ってるゴマ！」

背後から飛んできた攻撃を、なっちが横へ跳んで避ける。ごま塩は路地へ入りかけて、すぐ足を止めた。

「そっち駄目ゴマ！袋小路！」

「じゃあどっち!？」

「右！」



二人が曲がる。ごま塩は逃げながらも、街の構造を見失って
いなかった。狭い道へ敵を誘い、一度に追ってこられる数を
減らす。

「ここなら三人ずつゴマ！」

「それ先に言って！」

「今思いついたゴマ！」

なっちが加速する。

一人目の懐へ入り、すぐに離れる。二人目の攻撃を誘い、壁
際へかわす。三人目が向きを変えた瞬間、ごま塩が足元へ攻
撃を入れた。

「今！」

「分かってる！」

なっちの一撃が敵を吹き飛ばす。

だが、休む暇はない。次の一団が角を曲がってくる。



「まだ来るゴマ!？」

「来るね!」

「嬉しくないゴマ!」

再び走る。

何度か繰り返すうちに、なっちの動きが変わっていった。ただ速くなるのではない。前へ逃げるためだけでもなかった。

ごま塩が遅ければ、戻る。敵が横から回り込めば、先にそこへ入る。

速さを、自分一人のためではなく使い始めていた。

「なっち、前!」

「分かって――」

その瞬間、別方向から放たれた一撃がなっちへ迫った。

ごま塩が割り込む。

「ごま塩!」



小さな身体が吹き飛ばされ、地面を転がった。

「……痛いゴマ」

それでも、すぐに起き上がる。

「無茶しないでよ！」

「仲間置いて逃げたら、ヨルに合わせる顔ないゴマ！」

なっちが一瞬だけ目を見開き、それから笑った。

「じゃあ、二人で帰ろう」

「もちろんゴマ！」

ごま塩が退路を指し、なっちがその道を守る。

二人は最後まで、どちらかを置いていなかった。

第五章 ヨルとまふい

中心区域には、他とは比べものにならない数の敵が集まっていた。



その中央に、ヨルとまふいがいる。

「まふい」

「はい」

「下がってていいよ」

「嫌です」

「だと思った」

二人が同時に動く。

ヨルが先頭へ踏み込み、一撃で前列を崩す。敵が立て直すより早く、次の一撃が入る。右から回り込もうとした者には、まふいの鎖が絡みついた。

ヨルが前へ出れば、まふいも前へ出る。ヨルの背後を狙う者がいれば、鎖が先にその足を止める。

だが、敵はそれを待っていた。



ヨルを直接狙っても届かない。ならば、ヨルが必ず守ろうとする相手を使う。

「っ！」

まふいの足元で仕掛けが弾けた。

一瞬だけ、動きが止まる。

「まふい！」

ヨルが振り返った。

その死角から、刃が走る。

避けられた。

それでもヨルは、まふいの方へ身体を入れた。

刃がヨルの腕を掠める。

ほんの浅い傷だった。

一滴だけ、血が落ちる。

「……………」



まふいが止まった。

ヨルも、すぐに気づいた。

「……まずい」

黒いチョーカーは外れていない。胸元の鍵付き機構も、普段通りそこにある。まふいの力を安定させる制御そのものは、壊れていない。

それでも、これは別だった。

まふいの視線が、ヨルの腕へ落ちる。

赤い血。

見た瞬間、瞳の色が変わった。

緋色。

「……ヨルに」

空気が震える。

鎖が鳴る。



「傷をつけた？」

「まふい！」

ヨルの声と同時に、まふいの力が跳ね上がった。

最大百八十秒。

普段の安定状態とは別に存在する、制御限界の外側。

リミッターが外れた。

第六章 180秒

最初の数秒で、戦場の空気が変わった。

鎖が地面を裂き、迫っていた敵をまとめて薙ぎ払う。敵が距離を取ろうとしても、まふいの方が速い。

「まふい！」

ヨルが呼ぶ。

返事はない。



まふいの動きには、もう一つの意味しか残っていないように
見えた。

ヨルを傷つけた敵を排除する。

それだけだった。

ヨルは追いながら、秒を数えていた。

十秒。

中心区域の前線が崩れる。

敵の指揮官が叫んだ。

「距離を取れ！」

誰も間に合わない。

六十秒。

残っていた部隊が撤退へ切り替える。

まふいは止まらなかった。

「逃がさない」



「まふい、もういい！」

ヨルの声にも、振り返らない。

百二十秒。

敵の陣形はもう形を保っていなかった。それでも、まふいは逃げる者を追う。

その動きに、わずかな乱れが混じり始める。

百五十秒。

足が一度もつれる。

鎖を振るう腕にも、明らかな負荷が出ていた。

「止まって！」

それでも進む。

百七十秒を越えた。

ヨルが距離を詰める。

「まふい！」



腕を掴んだ。

まふいが振り返る。

緋色の瞳。

反射的に鎖が持ち上がる。

ヨルへ向きかけて――止まった。

「……ヨル」

「そう。私」

ヨルは手を離さない。

「もういいよ」

まふいの瞳が揺れる。

そして。

百八十秒。

力が切れた。



まふいの身体から一気に力が抜ける。

「まふい！」

倒れる前に、ヨルが抱き止めた。

返事はない。

呼吸はある。脈もある。限界まで解除状態を使った反動だと、ヨルには分かった。

ヨルはまふいを抱き上げ、安全な場所まで運ぶ。

「……半日は起きないかな」

眠るように意識を失っているまふいの頬へ、一度だけ触れる。

「ほんと、無茶するんだから」

その声は優しくかった。

だが、ヨルが立ち上がった時には、もう笑っていなかった。

残った敵を見る。

「よくも」



武器を握る。

「私の相方を、ここまで追い込んだね」

敵の誰かが息を呑んだ。

まふいが倒れたことで、ヨルは一人になった。

少なくとも、敵にはそう見えていた。

第七章 総帥

「一人だ！」

「今しかない！」

「全戦力を投入しろ！」

残っていた戦力が、一斉にヨルへ向かう。

ヨルは動かない。

まふいを寝かせた場所を一度だけ振り返り、敵へ視線を戻した。



「一つだけ」

静かな声だった。

「勘違いしてる」

武器を構える。

「私を一人にしたら、勝てると思った？」

次の瞬間、ヨルの姿が消えた。

最前列が崩れる。

二列目が反応するより早く、その横を抜ける。左右から挟もうとした攻撃は届かない。後ろから狙った者が武器を振り下ろした時には、ヨルはもうそこにいなかった。

包囲が意味を失っていく。

数で囲んでも、位置を変えられる。距離を取れば、詰められる。大技を準備しようとするれば、その前に潰される。

「何なんだ、こいつ……！」



「止めろ！」

「囲め！」

命令だけが増えていく。

ヨルは止まらない。

やがて、中心勢力の指揮官だけが残った。

「……化け物め」

ヨルは答えない。

一步、近づく。

「なぜ……そこまで強い」

そこで初めて、ヨルが足を止めた。

倒れた敵の向こうから、足音が近づいてくる。

レモン。トムカス。ゆうカス。いんカス。あめちゃん。にゃんこ。ごま塩。なっち。

全員、傷だらけだった。



それでも、誰一人欠けていない。

ヨルはその姿を見て、ほんの少し笑った。

「強い理由なら、一つだけだよ」

指揮官へ視線を戻す。

「帰る場所を守りたいだけ」

最後の一撃が落ちた。

長かった夜の戦闘音が、ようやく途切れた。

最終章 夜明け

朝。

黒く沈んでいた空が、少しずつ明るくなっていく。

十人は全員、生きていた。

まふいだけはまだ意識を失ったままで、ヨルの背中にいる。

「まふい、大丈夫？」



レモンが尋ねる。

「うん。半日くらい寝れば起きるよ」

「そっか」

レモンがほっと息を吐いた。

トムカスは大きく刃こぼれした剣を一度見つめ、それから鞘へ戻す。

「……勝ったんだな」

「ボロボロだけどな」

ゆーカスが言う。

「お前もな」

いんカスが返す。

「あめちゃん、そこ血出てる」

「にゃんこも」

「私はかすり傷」



「私も」

「絶対嘘」

「そっちもね」

少し離れたところでは、なっちが地面へ座り込んでいた。その横で、ごま塩が大の字になっている。

「もう一步も歩けないゴマ……」

ヨルが笑った。

「じゃあ置いてく？」

ごま塩が跳ね起きる。

「歩けるゴマ！」

「元気じゃん」

「置いていかれるよりマシゴマ！」

笑い声が広がる。



その声に反応するように、ヨルの背中でまふいがわずかに動いた。

「……ヨル……」

「ん？」

意識は戻っていない。

寝言だった。

「……無事で……よかった……」

ヨルが黙る。

背中のみふいを、少しだけ背負い直した。

「……こっちの台詞だよ」

朝日が街を照らし始める。

壊れた建物。崩れた道路。戦いの跡は、まだいたるところに残っている。それでも、十人は帰る方向へ歩き始めた。

一人で勝った者はいない。



誰か一人だけが守った夜でもない。

前へ出た者がいて、隣を守った者がいて、退路を残した者がいて、最後まで誰かの隣を離れなかった者がいた。

その全員が、今ここにいる。

後に人々は、この夜を《黑夜事変》と呼ぶことになる。

ヨルファミリアを潰すために仕掛けられた夜。

けれど、その終わりに残ったのは――十人だった。

――完――

